

平成 21 年 5 月 22 日現在

研究種目：基盤研究 (B)  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19320004  
 研究課題名 (和文) 中世における人格理解の発展——スコラ学と神秘思想から人文主義へ  
 研究課題名 (英文) The development of the concept of person in the middle ages - from scholastic philosophy and mysticism to humanism  
 研究代表者  
 Riesenhuber K (リーゼンフーバー K)  
 上智大学・文学部・教授  
 研究者番号：60053633

研究成果の概要：研究成果の概要：本研究では、思想史を中世から近世へと促進させた重大な原動力は人格理解と自己認識の理論にあったことを示すことが出来た。知性単一説を論破した後、後期スコラ学者は個人の理解行為と自己規定とともに自己意識の絶対的确实性を人格の特徴とした。それに基づき、人間の尊厳はルネサンスの中心概念となり、1600 年前後のスペインの新トマス学派の人権論と自己意識による認識論を通してデカルト流の近世思想の基礎付けとなった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2008 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
年度			
年度			
総計	5,100,000	1,530,000	6,630,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、倫理学

キーワード：自己認識、主体、唯名論、中世哲学、反省、ルネサンス、自由、人間像

## 1. 研究開始当初の背景

啓蒙主義の時代に遡り 20 世紀半ばまで広がっていた見解によれば、近代思想は、ルネサンス期における古代文化の復興の結果であり、ひいては古代と直結した新しい出発であった。このように、哲学史研究において古代から近代への飛躍が一般的に正当なものと見られていたために、1000 年以上続いた中世が「暗黒時代」として研究対象から抜け落ちることになった。しかし 19 世紀後半以来の実質的な中世研究において、中世文化による近世への基礎付けが明確になるにつれて、中世と近世の間の連続が研究課題として確認されるに至った。したがって、最近の約 50

年間では、社会・政治論、文化理論などに関する多くの個別的研究の結果、中世から近世への移行の諸原因を探る傾向が強くなってきている。しかし、この連続における思想史の変遷の特質と原動力に関しては、部分的な指摘しかなされなかったために、原典に基づく一貫した理論が欠落していた。それゆえ、思想に関しては、中世と近代の間の連続に対する理解だけではなく、近代の哲学思想の説明においても困難が生じることとなった。このような問題意識を背景にして、本研究では中世スコラ学からヒューマニズム・近代初期思想への移行の根本的な動機を哲学的思想そのものにおいて吟味することを目的とし、

その際、近代思想にとって特徴的な人格理解を手がかりにすることが定められた。さらに、本研究に参加する研究者は、中世末期および近世初期を専門とし、上智大学中世思想研究所の様々な研究プロジェクトにおいて今まで協力しあってきたゆえに、本研究の包括的な課題に取り組むために望ましい準備が出来たと判断されることから、共通な問題意識と各人の専門的知識をあわせるかたちで本研究の課題を設定することになった。

## 2. 研究の目的

本研究では、中世から近世への転換に関する最近の研究経過を取り入れながら、思想史そのものによるこの転換の原動力を再検討すべきだという共通な問題意識から出発する。その際、現代においてしばしば見られるように、15・16世紀の移行期における新しい諸契機に注目するだけではなく、中世思想自体における問題意識を促進させた諸動機を、近世へのつながりに関して検討することにした。この問題提起に従って、中世と近世の間の一貫性と差異をより明確に把握することで、両時代のそれぞれの特徴とともに、中世における近世への発展を呼び起こす諸動機、また逆に近世思想における中世的遺産を浮き彫りにすることによって、両時代の思想に対してより正確な解釈を行う可能性を拓き、ヨーロッパ思想史におけるこの転換期を、そのダイナミックな発展において理解へともたらしような見通しを示すことが本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

本研究の方法としては、まず、近代の思想の特徴をその時代の自己評価に従って予備的・仮説的に幾つかの中心概念で捉え、そこからこれらの概念自体の起源とその歴史的周辺に見られる諸問題へと遡ることとした。その中心概念として、主に「人格」、「主体」、「自己」（自己認識、自己意識、自己規定等）を選んだ理由は、それらが哲学史においてだけでなく、近世・近代の学問においても答當時の諸文学においても主流であり、当時の自己理解を根本的に規定したと思われるからである。次に、これらの概念とそれによって指摘された問題領域の中世思想における形成期へと遡り、それらを生み出した問題意識とその正確な意味を解明し、盛期・後期スコラ学と神秘思想にわたるその発展を概念的、また問題史的方法で辿ることにした。このような解釈学的な意味での影響作用史を吟味するに当たって、各時代に興った古代の源泉への新たな遡及、諸学派の間の論争、新しい問題提起を重視して、当時提示された学説の近世哲学の起源（17世紀初頭）への伝達と内容的な連続に関して検討することを、

各研究者、研究者の小グループ、また本研究の全体会議の課題とした。この方法を採用することによって、各研究者が自分の専門のテーマに関する理解を深めながら、密接な交流によって共通な展望と結論を目指すことが可能になった。

## 4. 研究成果

二年間行われた本研究では、中世スコラ学と神秘思想から人文主義を経て、初期近世哲学への転換の動機と思想的意味を解明し、この移行の諸契機を以下のように理解することが出来た。すなわち、(1) 近代思想を特徴付ける主体 (subjectum: 基体、主体) 概念の起源は (17・18 世紀の推察も見られたが) 今まで不明瞭だったが、13・14 世紀の自己意識理論に遡らせることが出来た。当時の認識観 (オリヴィ) によれば、意識行為は自らへの反省の「基体」であるとともに、その再帰性のゆえに自らを自己意識的な「主体」へと形成するので、subjectum の意味が自己意識を遂行する主体へと発展する萌芽が見られるようになった。(2) また「人格」概念は 5 世紀古代末期キリスト教教父神学においてキリスト論と三位一体論の中心的な概念として形成され、6 世紀初頭に (ポエティウス) 人間にも適用可能なかたちで一般存在論的な定義を受けるに至ったと同時に、人間の尊厳と偉大な使命がキリスト教的新プラトン主義において展開されてきた (ニュッサのグレゴリオス)。教父時代のこの人間理解は 12 世紀初期スコラ学において積極的に受けられ、思弁的 (リカルドゥス) また習徳的 (ベルナルドゥス) な意味で考察されることになり、更にアウグスティヌスの自己探求理論を取り入れて (サン=ヴィクトル学派)、13 世紀の盛期スコラ学ではアリストテレスの実体概念を背景に人格概念における自律と自己規定が強調された (トマス・アキナス)。さらにアリストテレス主義の導入に伴うアヴェロエス主義の危機と断罪 (1260-70 年代) の結果、思惟の一般性を人類に共通な普遍的知性によって説明する説が退けられ、自己経験において検証できる各個人の思惟的活動が人間像の核心として確立された (アルベルトゥス、トマス)。すでに 13 世紀半ば以来、特にフランシスコ会学派においてアウグスティヌスの意識論を基に自己意識が認識と自由の基盤とされ (ドゥンス・スコトゥス)、またドイツのドミニコ会学派 (ディートリヒ、エックハルト、ゾイゼ) の神秘思想においては、個人の内面性が新プラトン主義の知性観を通して主題とされた。(3) 思想的に最も重大と思われるこの転換によって哲学・神学、ひいてはあらゆる学問の基盤は、存在理解の形而上学的諸原理から個人の認識を根本原理とする反省的自己把握へと移ることにな

り(ウィリアム・クラソン)、それに伴い認識の対象的内容の代わりに認識行為そのものの再帰的・自己成立の絶対的明証性が思惟の確実性の第一原理と認められることになった。したがって存在に向かっている思惟のいわば直線的な志向性の妥当性が14世紀の唯名論(オッカム)において疑問視され、精神の反省的超越論的自己探究が15・16世紀のイタリア(フィチーノ、ピコ)ないしドイツ(クザヌス)の人文主義において哲学の根拠付けとして受け入れられるとともに、自己規定としての人間の自由が宗教改革者の神学的予定論に対して弁護された(エラスムス)。同時に16世紀末のスペインのドミニコ会学派(ビトリア)においてはトマス・アクィナスへの立ち返りを通して自由論は人権論と国際法理論へと発展した。イタリアや北方の人文主義のむしろ文学的な人間像は、盛期・後期スコラ学の延長線上に立つ17世紀初頭のイエズス会学派(デ・ルゴ)の人文主義において、その哲学的根拠付けを得て、当会の学院を通して全ヨーロッパに広がった。こうして中世スコラ学的神秘思想的精神形而上学は自己意識をあらゆる認識の確実な基盤と第一原理とすること(メンドサ)によって、反省的に自己意識する人格(ロック)を認識そのものの起源とみなす近世的な思考(デカルト)へと繋がることになった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 16件)

- ① 長町裕司「存在—形而上学」に對立する〈存在の思惟〉?——トマス・アクィナスとマルティン・ハイデガーとの、未だ貫徹されざる歴史的対決(eine geschichtliche Aus-einander-setzung)へ向けて——」『上智大学哲学科紀要』(上智大学哲学科)、35、23-87、2009、査読無
- ② K・リーゼンフーバー、「否定神学・類比・弁証法——ディオニュシオス、トマス、クザヌスにおける言語の限界と超越の言表可能性——」、『思想』岩波書店、1006、6-40、2008、査読有
- ③ K・リーゼンフーバー、「神学の大全の礎(トマス・アクィナス)」『命題コレクション哲学』ちくま学芸文庫、88-95、2008、査読無
- ④ 佐藤直子「神の自己展開としての宇宙——『知ある無知』における宇宙論への一考察——」『上智大学哲学科紀要』(上智大学哲学科)、34、45-61、2008、査読無
- ⑤ 佐藤直子「現行の翻訳プロジェクト

—原典翻訳の意義——」『2008年度上智大学研究機構研究企画・研究成果報告書』(上智大学研究機構)、111-114、2008、査読無

- ⑥ 光延一郎「真理と自由、まことと恵み①——「真理はあなたたちを自由にする」『福音宣教』(オリエンズ宗教研究所)、62、39-45、2008、査読無
- ⑦ 長町裕司「知性的活動原理における、〈神のimagoの在り処〉の究明——ドイツ神秘思想成立へ向けての「理論的布石」としてのマイスター・ディートリッヒ——」『中世思想研究』(中世哲学会)、50、91-102、2008、査読有
- ⑧ O'Leary, Joseph, Paul, Origen and Melancthon on Justification, Australian Ejournal of Theology 11, 頁不明 (Internet Journal), 2008, 査読有
- ⑨ O'Leary, Joseph, The Afterlife of Renaissance Humanism: Marlowe, Milton, Goethe, English Literature and Language, 45, 15-55, 2008, 査読無
- ⑩ クスマノ ジェリー (共著 et al.), 「イグナチオの霊性と上智大学のアイデンティティ——「霊操」と上智大学の教育ミッション」『2008上智大学研究機構 Festival—研究企画・研究成果報告書』(上智大学研究機構)、36-39、2008、査読無
- ⑪ 荻野弘之「西洋思想における老いの諸相——老いの歴史を語ること」『倫理学年報』(日本倫理学会) 57、7-18、2008、査読無
- ⑫ K・リーゼンフーバー、「フライベルクのディートリヒの知性論」、『中世と近世のあいだ——14世紀におけるスコラ学と神秘思想——』知泉書館、55-124、2007、査読無
- ⑬ K・リーゼンフーバー、「転換期としての十四世紀——序言に代えて——」、『中世と近世のあいだ——14世紀におけるスコラ学と神秘思想——』知泉書館、v-xii、2007、査読無
- ⑭ K・リーゼンフーバー、「マルシリオ・フィチーノのプラトン主義と教父思想——キリスト教哲学の一展望——」、『カトリック研究』(上智大学神学会)、76、1-44、2007、査読有
- ⑮ K・リーゼンフーバー、「フィヒテの宗教哲学的思惟の発展」、『フィヒテ研究』(日本フィヒテ協会)(晃洋書房)、15、42-68、2007、査読有
- ⑯ 竹内修一「物語における自然法——非

歴史的な法の歴史的な働き——」『カトリック研究』（上智大学神学会）、76、167-200、2007、査読有

〔学会発表〕（計 5 件）

- ① 川村信三「日本思想史のなかのアリストテレス＝トマス「デ・アニマ」の位置づけ——『講義要綱』付加部分から見る日本的宗教心性との確執——」上智史学会大会日本史部門（上智大学）2008年11月17日
- ② 長町裕司「マイスター・エックハルトの根本テーゼ „Esse est Deus “ ——その、聖書的かつ形而上学的基礎の開明へ向けての準備考察——」中世哲学会（明治学院大学）2008年11月16日
- ③ K・リーゼンフーバー「中世スコラ学における自己認識の問題」上智大学哲学会（上智大学）、2008年10月19日
- ④ 菅野カーリン「人間の尊厳——①その発展と使い方 ②その背景にある聖書の人間像」「人間の尊厳を問い直す」研究会（上智大学）2008年10月14日 21日
- ⑤ 光延一郎「イグナチオ的・イエズス会的教育と恩恵神学とのつながり」上智大学学内研究：「イグナチオの霊性と上智大学のアイデンティティ——『霊操』と上智大学の教育ミッション」（上智大学）2007年10月23日

〔図書〕（計 3 件）

- ① K・リーゼンフーバー『中世における理性と霊性』知泉書館、686、2008
- ② 光延一郎『（編集）キリスト教と人権思想』サンパウロ、295、2008
- ③ 上智大学中世思想研究所編『〈リーゼンフーバー編集〉『中世と近世のあいだ——14世紀におけるスコラ学と神秘思想——』574、2007

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

**Riesenhuber K**

上智大学・文学部・教授

研究者番号：60053633

### (2) 研究分担者

佐藤 直子

上智大学・文学部・准教授

研究者番号：60296879

長町 裕司

上智大学・文学部・教授

研究者番号：90296880

**Joseph O'Leary**

上智大学・文学部・准教授

研究者番号：50235818

川村 信三

上智大学・文学部・准教授

研究者番号：00317497

竹内 修一

上智大学・神学部・准教授

研究者番号：60349016

菅野 カーリン

上智大学・文学部・教授

研究者番号：20226418

**Hollerich Jean-C**

上智大学・外国語学部・教授

研究者番号：00276510

クスマノ ジェリー

上智大学・総合人間科学部・教授

研究者番号：30235791

光延 一郎

上智大学・神学部・教授

研究者番号：60338431

荻野 弘之

上智大学・文学部・教授

研究者番号：20177158

中村 秀樹

上智大学・文学部・講師

研究者番号：90468596